部長も僕も嘘つきな小説

しぃじぃ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
部長も僕も嘘つきな小説

【Ｎコード】
Ｎ６７７０Ｙ

【作者名】
しぃじぃ

【あらすじ】
ピクシブで掲載している小説です。ピクシブの人がこちらの小説を見つけたりできるのでしょうかね。一応、私の全力ロリババア小説です。

一話（前書き）

こいつは私の趣味前回のロリババアを書きました。そういった特殊なマイノリティが苦手な人は敬遠なさってくださいませ。以上です。一日ずつに更新していこうかと思います。気長にお付き合いくださったら幸いです。

一話

来年の抱負。
ノーと言える男。
恐らく、無理。
なぜ？
肉体的弱者にして、精神的弱者である僕は何も答えられないからね。いやいや、別に体が弱いとかそういうわけじゃないんだけどね。こう、なんていうのかな必然的にそうなってしまう理由があるというか、なんというか。
それの話は別にしなくていいんだ。だって、ただの言い訳になりそうだし、さらにみじめになりそうだし。だから、しない。
しないったら、しない。いつかするけど。しなきゃいけないけど。
今はしない。

それは唐突だった。
新入生は新しい制服にも慣れて、気が緩みだすころの五月の昼下がり。
「いきなりなのだけれど。岩屋君、写真を撮ってきてちょうだい」
週一の部会で、部長から拝命賜った指示は、「川の写真を撮ってこい」とのこと。
「しかし、なんでまた川の写真なんですか？」
正直、体力がない僕としては勘弁願いたいものだ。だって、きついもん。
「川じゃないと、駄目なのよね。空では駄目だし、海なんて論外。というわけで、川の写真を撮ってきてちょうだい」
偉そうに腕組みして、眉を八の字にして、悩む部長。
「答えになってません。そもそも、文芸部なのになぜ写真が必要な

んですか」
「だまらっしゃい。私が行けと言ったら、黙って行きなさい」
「それと、部長。椅子の上に仁王立ちするのはやめてください。後から掃除するのは僕なんです」
ああ、情景描写が足りないなぁ。簡潔にいこう。簡潔に。僕。部長。部室。二人っきり。故に部員は二人。悲しいかな。僕は彼女の舎弟。僕と部長は長机を挟んで対面する形。僕は椅子に腰かけている。部長は椅子の上で仁王立ち。しかし、小さい。何とも悲しくなるほどに小さい。胸も小さいし、背も小さい。しかし、それが良い。注意書き、僕は変態ではないです。
「ほう、岩屋君。私が常々気にしていることをそんな風に言っちゃうんだ？　私傷ついたわぁ。人の身体的特徴をそんな風に言っちゃうなんて」
「僕はなにも言ってませんよ」
「きみの視線が物語っているのよ」
部長の視線が冷たい。しかし、謝ったりしたら、さらに怒るから何も言わない。
僕は挨拶もそこそこにして、部室を後にした。

一話（後書き）

学生時代のうらぶれた気持ちが私の作品の原動力でございます。

二話（前書き）

この更新は予定更新をしています。初めての機能なので、ちょっとドキドキです。

二話

いきなりの回想。

四月一日。

入学式前の登校日。皆が皆互いの様子を伺う教室の空気。新学期に向けての期待と不安で胸いっぱい。僕は不安で胸一杯。

教師が何か注意事項を話して、「以上です」との言葉で、締めくくった。すると、皆がバラバラに歩き出して、どこかへ向かい始めた。

僕は教師の話を全然聞いていなかったので、この後の動きがまるでわからずにただ皆が歩く方へと付いて行った。なんと立派な協調性だろうか。我ながら辟易する。

皆が行きついたのは、体育館だった。周りの同学年達の聞こえてくる話し声から察するに、今から、部活紹介が行われるらしい。

誰とも、話すことなく部活紹介の時間がくるまで、静かにしていた。だって、初対面の人と話すのは恥ずかしいので。

一つの部活あたり、与えられた時間は五分。

その五分の間に各部活は様々な趣向を凝らしていた。部活によっては真面目な紹介もあれば、笑いを取りに行く部活。

見事にスベッた部活。笑いによって場を和やかにしてくれた部活。

この後から、各々興味のある部活を見に行くというわけらしい。

運動部の紹介が終わり、次は文化部となった。

文化部というと、やはり、おとなしい人が多いのか、運動部ほどの活発な部活紹介はあまり見られない。

問題はここだ。

文芸部の部活紹介が始まった。

マイクを持って、一人の少女が新入生の前に出た。

皆、ぎょっとした様子で少女を見つめた。

高校生にふさわしくない容姿。

道に外れた格好をしているわけではない。制服は学校指定の紺色の一品だ。スカートは膝まで隠れているわけだし、何も問題はない。しかし、大きさが問題なのだ。

目測だが、身長は百二十に満たないだろう。ていうか、性格な数字は知ってるし。だけど、明記はしない。死にたくないからね。命は大事にしよう。

腰で切りそろえられた黒髪は見た目の年齢に見合わない程の髪の量を誇っていた。

それがまた、見る者を釘付けにする不思議な魅力を持っていた。

僕は咄嗟に顔を伏せた。木を隠すなら森の中とはよく言ったものだ。今の僕は完全にその他大勢としてまぎれている。完璧だ。なにも問題はない。

彼女が周りのざわめきを物ともせずに、部活の紹介をこなした。

生徒会の生徒のアナウンスで同級生達は思い思いの部活へと繰り出していった。

僕は、周囲にまぎれるようにして体育館の外へと向かう。一刻も早くここを出なければまずい気がした。違う、確信だ。

しかし、僕の予測は甘かった。

彼女はどのようにしてか、僕を見つけた。

僕は捕らえられた。

どこかの刑事ドラマで見た犯人が取り押さえられるシーンを想像したら間違いはない。言うまでもなく僕が犯人役。たしか、ドラマでは胸のたわわなお姉さんだったから、犯人はムフフな状態だったけれど。僕にはそんな役得はない。

「偶然とはまさしくこのことだわ。私の右腕とあなたの右腕ががっちりと絡まってしまった。これも何かの縁。さぁ、さっそくこの入部届けにサインをしてもらいましょう」

「お願いします。許して下さい。本当に出来心だったんです。なんというか、臆病の虫が湧いたんです。壇上に立つその姿を見たときにとてもまぶしくてみていられなかったんです」

勿論、真っ赤なウソだい！

「あら、仕方ない。もうほんとに申し訳ない。なんとかしないといけないわ。そのためには、あなたは文芸部に入るしかないわ。さぁ、この入部届けにサインをしましょう。これ以上ガチャガチャ言うならお仕置きしちゃ～うぞ」

黙れ、ばばぁ。俺は見た目に騙されない。あなたの年齢を知っている。

「きみ、今なんつった？」

「なにも申しておりません。ええ、決して。この瞳が嘘をつくとお思いですか？」

瞳見えないけどね。

乱暴者は俺をそのまま、文芸部のブースに連れて行って、無理やりサインをさせた。字が歪んでいたのは、僕の心の震えなのか、腕の痛みなのかは定かではない。

二話（後書き）

スタートダッシュがおそいことに定評のある作者でございます。

三話（前書き）

予約掲載で一時間ごとに掲載をするという試験的策略。一話目を知らない人は一話目へゴーです。

三話

以上回想終了。

かくして僕の所属する部活は強引な勧誘によって決定した。後悔はないのか、と問われたら叫んで夕日に向かって走り出したい程に後悔している。だから、自問しない。

それによくよく考えたらあれは部長なりの気遣いだったのかもしれない。部長とは学外においても付き合いのある古い友人なのだ。

年下の優柔不断な友人を無理やり引っ張ってでも面倒を見てあげようという優しさなのかも。決して、ただこき使える舎弟がほしいわけじゃなかろうよ。

そうだそうだ。今、さらっと言ったけど、僕と部長は付き合いのある友人なのだ。だけど、これもここでは深くは書かない。だって、話が脱線してしまうだろうから。

結局、いつかは書くだろうし。

最寄りのバス停でバスを待つ。学び舎というのは孤高なる立地に立てるのが流行っていたのだろうか。

僕が通う高校では、山の天辺に校舎を構え、交通の不便は限りない。近くの団地に住む者を除いて、多くの者はふもとまで降りなくてはいけない。

歩いて降りて行く者。地域住民の冷たい視線を受け流しつつバスに乗り込む者。様々である。僕は冷たい視線を受けながらバスに乗り込む人間だ。

バス停に並ぶ。

そう言えば、明日から大型連休だ。なのに、僕は友人と遊ぶ予定もなく、部長の指示で川へと向かうのだ。いやおうにも気分が沈む。

見てみろ。周りの学生のあの明るい顔を。彼ら、彼女らはなんであんなにも晴れやかな顔をしているのだろうか。それは暴君たる部長がいないからだろう。

この要因はかなり大きいぞ。
ああ、悔しい。ああ、口惜しい。もし、僕が彼女の制止を振り切って、それこそ、華やかな部活へと入部していたら、今の僕はないのかもしれないのに。
可愛いマネージャーがいてほしいです。
僕の汗を拭う優しいマネージャーがいてほしいです。
というか、異性との触れ合いがほしいです。
部長は論外。彼女は……ねえ？　色々と残念だし。期待はしないのさ。
想像力逞しい僕には文芸部というのは案外性に合っていたのかもしれない。
部長に感謝感謝。

四話（前書き）

雑談というのはいいものですよね。

四話

玄関を開けると見た目十歳程の少女がいた。前かがみになって、靴ひもを結んでいる最中だった。残念ながら胸はない。ほんとに残念だ。

我が姉である。明らかに俺より、若く見えるが姉である。部長と同じ類のものだ。

柔らかそうなほっぺの持ち主である。すげえ、ひっぱりたい。果物で言うなら、桃みたいな感じ。

「おかえりなさい」

「ただいま。そして、いってらっしゃい」

「いってきます。夕飯は何が食べたい？」

「なんでもいいや。適当に美味しいものを」

僕の言葉を聞くと、姉は挨拶もそこそこにマイバックを背負い、歩き出した。マイバックは彼女の体程の大きさはある。小さいものが、大きいものを持っていると、それだけで保護欲が掻き立てられる。

母は家を留守にすることが多い。必然的に家事をこなすのは年長者の姉となっていった。

九年前に高校を卒業した姉は、そのまま家に残り、家事手伝いとしての日々を過ごしていた。

姉が家事を行うようになってから、母が家を空ける頻度は多くなった。恐らく、家にかまわないでよくなったからだろうか。

姉は日がな一日中、家事をしているか、パソコンをしているか、読書をしているかの三つに分かれるというインドア派な女性だ。

僕は部屋に戻り、大型連休の課題に手をつけては、その難解さに頭をひねらせて思考のループに陥っていると姉が帰ってきた。

玄関まで行き、姉の背負うバックを受け取る。軟弱な僕の腕では持つことすらままならない重さだ。しかし、ここであきらめては男

が廃る。
「夕飯の催促？　ちょっと待っててね、すぐに作るから」
後ろの方から、僕を追うようにして声が届く。とっとっとという軽い音を姉が鳴らす。
「いや、別に夕飯の催促とかいうわけじゃあないんだけど」
「じゃあ、何」
「姉さんはデジカメって持ってたよね。あれ貸して」
「ないこともないけど、探すのが面倒臭いという私の本音は隠すべき？」
「僕に言うのは間違いだったかな。そこを何とかならない？　お願い」
「しかし、急な話ねえ。なんでまたカメラがほしいのよ」
「部長の指示で写真を撮りに行くんだ。その為に風景の記録用としてカメラを貸してほしい」
「ああ。亜子ちゃんの指示か。しかし、風景を撮るためにか……気合いで写生して来なさい」
「無理言うな。僕の美術の評定は2なんだぞ。新しい何かが紙の上で生まれてしまいそうだ」
「大丈夫よ。あなたはデキルコッテ私はシンジテルから」
「言葉に力を持たせるなら、片言はよしてくれ。そこまで、僕にカメラを貸したくないのか」
「だって、カメラ探すの面倒だもん」
あんだと？　可愛さでごまかせるとか思ってんのか。このロリババア。
「ロリババアだなんて、卑猥だわ！」
そうですか。俺には地の文におけるプライバシーすらも存在しないのですか。
「大体、あなたは考えていることが顔に出やすいのよね。さっきだって、私が言った。気合いで写生しなさい発言も脳内ではどんな誤字変換が起きているか分かったものじゃないわ」

「……」
無心だ。考えるな、感じるんだ。落ち着け。深呼吸。
「わかった。僕はカメラを貸してもらえるの？　貸してもらえないの？」
気合いでバックを冷蔵庫まで運ぶと、床に下ろした。
重量感溢れるバックの沈む音。
しかし、またそれを軽々と持ち上げる小さな手。
「ごめん、こっちだから」と、バックをキッチンの方まで片手で運んでいった。僕の何かが崩れそうになる。
そうだ、彼女はその見た目に似合わずに素晴らしい膂力の持ち主なのだ。
これでは僕が卑屈になってしまうのも仕方ないだろう。背丈は小学四年を迎えるころには、追い抜いたものだが。
こればかりはどうしようもならない。
「さっきのカメラの話だけどねぇ。部屋の模様替えを手伝ってもらいましょうか」
そういう小さい姉の様子は、どこか楽しげに見えた。

五話（前書き）

探究心なんてかけらももちませんな

五話

「ほら、はやく」
姉に促されて僕は姉を抱き上げる。
「どう？」
「うん、なかなかいい感じ」
姉は小さい。故に高いところに手が届かない。
そこで、俺の登場。
棚の上の写真箱を持ってきて、蛍光灯を替えて、私を抱っこして、などなど、様々な命令を要求してくる。今まで、何度か部屋の模様変えを手伝ったことがある。その時も散々こき使われた。
今は、姉を抱き上げて、部屋の点検をしていた。「高い視点から周りを見ることは大事なことだわ」とのこと。
やはり、改めて思うが姉は小さい。こんなに軽い身体に一体あのエネルギーはどこに詰まっているのだろうか。
「よし、オーケー。問題なし」
「しかし、ところがどっこい姉ちゃん。まだ問題はあるのだ」
「さぁ、なにかしら、まったくもって問題点が浮上しない部屋だけれど」
「肝心のデジカメが見つかっていない」
「……」
おいおい、だんまりですか。僕があんたのわき腹を握っているというのはわかってらっしゃるのかい？　これから、超絶笑いの地獄に落し込んでやることも可能なんだぞ。
「他に探していない場所のこころあたりはないの？」
「ないこともないけれど……」
そう、言葉を発する姉は浮かない顔をしている。
僕の周りには隠し事が多くある。隠しごとというのは隠してこそのものだろう。しかし、彼女は僕に隠しごとの存在すら隠せていな

い。
この様子だったら、僕に見せたくない場所にあるのかもしれない。なら、僕は一旦退くべきだろう。
「ふん。じゃあ、僕は部屋に戻っとくから後から、カメラを持ってきて」
「うん、ごめん」
そんな風に謝られたら、とても気まずい。別に悪いことはしてないさ。ただ、話したくないことなんてのもあるだろうさ。しかし、僕はそれに関して何も言うことはしない。今までそうだったし。
妙な事情なんて知りたくない。
痛い目に遭いたくない。
僕は姉を床におろして、退出した。うつむいたままの姉の様子がみじめだった。

六話（前書き）

余談ですが。私は乙一の短編の「陽だまりの詩」が好きでした。作中の小説もそういった要素を含んでいます。乙一の作品が苦手な方はご注意を。

六話

姉の部屋を出て、自分の部屋へと引っ込む。もやもやとした気分で、愛読書を読み始める。

それはある短編で、製作者を埋葬するために作られたアンドロイドの話だった。

僕がこの話を知るきっかけとなったのは、姉だった。ような気がする。確か、僕が小学四年生だったか、僕はついに姉の背を追い越すことができた。そのことを事あるごとに他ならぬ姉に自慢していた。

小学四年生というと、姉は高校を卒業したころだ。僕が家から帰ってくると、姉はいつも本を読んで過ごしていた。見た目は同級生と変わらない姉の様子を見ていると、ちゃんちゃらおかしく思えた。

生来からの読書好きというのもあったのだろう。しかし、姉はことさらその作者の本を集めていた。母も、その本を集めていたきらいがある。僕が本を部屋に持ち込み、返さずにいると、母はその本を紛失したと思い、すぐさま古本屋で同じ本を買い求めてくるのだった。

その本が書斎にないという状態が母は落ち着かないらしい。

そして、書斎にはだれも使用していない机があった。長いこと放置されたままの様な机があった。

これは推測の域を出ないけれど、もしかしたらあの机は父の物なのかもしれない。

……

好きな作品というのは何度、読んでも胸を打つものがある。

最期のアンドロイドの主人公と、製作者の語りが物語に緩やか収束を予感させていく。

最後の見開き一ページ。製作者の謝罪。アンドロイドの否定。生とは、死とは。

最後の結論。
物語の余韻に浸っていたら、隣室の部屋から重量のある物が落ちる音がした。隣の部屋は姉ちゃんの部屋だ。何かを落したのかもしれない。
万一にも、姉ちゃんには怪我はないだろうけれど、何かアクシデントが起きた時の心細さは限りないものがある。部屋の中で、座り込んだままの姉ちゃんを想像したらいたたまれない。
一旦、部屋を出て、姉ちゃんの部屋をノックする。返事を待つ。
返事がない。
万一の事態？　いやいや、かなりまずい。頭でも打ったのかも。
「姉ちゃん、大丈夫！」
部屋の様子。倒れた椅子。倒れた姉ちゃん。覆いかぶさる本の数々。胸を見ると、上下している。生きてはいるようだ。
山となった本を払いのけて、姉ちゃんをサルベージ。
「何があった？」
「ちょっとばかし転んだわ。もう私は無理。後はよろしく頼んだわ。ガク」
自身で効果音を用意する程度には、元気なようだ。恐らく、高いところにある物を取ろうとして、失敗したのかもしれない。
「怪我はないようなんで、僕は部屋に戻る」
立ち上がろうとする僕を姉が掴む。それが弱々しい握り方なら愛嬌もあるのだろうが、青あざの心配をしなくてはならないほどだ。
「あなたは、この状況を見て、放置するというの？　私はそんな風にあなたを躾けた覚えはないわ」
しかしながら、それこそ妙なものを見つけた日にはたまったものじゃない。
「大丈夫、これらの本を元に戻したらすぐにカメラを用意するから」
「わかった。必ず、カメラの用意を頼むよ」と言って、部屋の整理をまた始めた。
姉が散らばった本をまとめて僕に渡す。僕をそれを受け取って、

指示通りに本を並べていく。
姉ちゃんが所有している小説、教養書等々。次は雑誌にまぎれて高校時代と、中学時代の卒業アルバムを並べた。
作業すること十分少々、作業はすべて終了して、姉ちゃんが指示した。
「ありがとう、助かったわ。カメラは本棚の上に置いているわ。だけど、決して他の物には触らないでね」
「わかった」
大丈夫さ。僕も僕の部屋にあるプライベートな物を触られたくないしね。
薄型のカメラを受け取り、礼を述べて、部屋を退出しようとした。その時、声が掛かった。
「そう言えば、風景って言えば、どこの写真を撮りに行くの？」
「言ってなかったっけ？　川の写真を撮りに行くんだよ。場所は指定されてないから、僕に一任されてるみたいだけど……」
僕は言葉を失った。姉の顔がみるみる内に蒼白となったからだ。なにか失言でもあっただろうか。
約二秒間のうちに、ここ一分ほどのやり取りを思い返してみる。特別思いあたることもない。
「……そう、気をつけてね」
僕は姉ちゃんに部屋を追い立てられるかの様な気持で、部屋を後にした。
姉ちゃんの顔を見ることができなかった。

七話（前書き）

ユニークアクセスがあると心がわくわくしてきますね。もしかしたら、私の小説を楽しみにしてくださる方がいるのかと思うと、うれしくて仕方がないです。

七話

ああ、すがすがしき朝。曙光はやさしくさしこみ、瞼を通して刺激を与えてくれる。鳥も鳴き始めようかどうか迷う時間であるようだ。

耳を澄ませば、階下ではせわしなく動いていている音が聞こえてくる。姉ちゃんがその小さいからだを最大限に駆使して朝食を作っている様子が思い浮かぶ。

その音を耳にしていたら、このまま再び眠るのは申し訳ない気がして、のそのそと出かける準備をはじめた。昨夜の内に済ませておくのがデキル奴なんだろうけれど、僕はデキナイ奴なんで、これでいいや。

動きやすいジャージに着替えて、デジカメの動作確認をして、リュックに必要と思われるものを放り込んでいく。

リビングまで行くと、味噌汁と焼き魚、そしてご飯が二人分ずつ盛られていた。

姉ちゃんは腕組みをしていた。傲然とした態度ですべての理不尽に戦いを挑むかの様である。

もしかしたら、もしかしなくても姉ちゃんは僕が降りてくるのを待っていたのかもしれない。

僕が動けないでいると、姉ちゃんは僕に顔を洗ってくるように言った。

僕は言われるがままに顔を洗った。洗顔して幾分明晰になった頭で再び姉ちゃんの様子をうかがう。人とのコミュニケーション能力に乏しい事を自覚している僕ですら、姉ちゃんが不機嫌であるというのがわかる。

対面の席に座り、おごそかな雰囲気で朝食が開始された。今までここまで重々しい空気で食事をしたことがあるだろうか。いや、ない。でましたよ、反語。

今日の味噌汁も美味しい。だとか、魚の焼き加減が絶妙である。だとか、空気を払拭するために会話を試みるが、返事は曖昧なものだった。しまいには、目を伏せてしまった。すげえ、いたたまれない。僕の必死さはなに？

途中からむなしくなったので、何もしゃべらない。いっしょに食事を取っているということは思ったほど絶望的な状況じゃないだろうさ。

何も会話をしないものだから、いつもよりも圧倒的に食事を終える。食器を流しにおいた。そのままリュックを背負い家を出ようとすると、声を掛けられた。勿論、姉ちゃんから。

「川に行くの？」

「うん。行ってくる」

「……やめといた方がいいんじゃないかしら」

「なんで」

「なんででも。もしかして、川でおぼれるかもしれないでしょうが」

……あの川でおぼれることができる人間がいたら連れて来て欲しい。川と一口に言っても様々なもので、潤沢な水を湛えた豊富な水量の川なんて近所にはない。僕の近所にあるのは、舗装整備されたコンクリートの川だ。晴れの日が続くと目に見えて川の水は目減りするし、雨が降ると驚くほど水量は増す。

そして、ここ最近は雨は降っていないから、川とは名ばかりで干上がった通路みたいになっている。

「大丈夫だよ。僕はおぼれないからそんなに心配しなくていいよ。お昼までには帰れると思うから、お昼の用意、よろしく」

「……わかった」

僕としては、姉がここまで機嫌を損ねる理由が思いつかない。

「そんなに、心配ならいっしょに来る？」

「冗談じゃないわ。私は部屋でこもっている方が性に合っているわ」

今まで、目を伏せていた姉ちゃんが顔を上げる。

今のは禁句だったのだ。と理解した。

七話（後書き）

次の更新は１１月２１日２１時です。一時間ごとに更新いたします。

八話（前書き）

長広舌が大好きなんです。

八話

家を出た時、朝の清涼な空気が僕の肺を満たした。頭がぐちゃぐちゃにしていたので、腹いせに電話してみた。三コールで電話に出た。

『何かしら。何かしら。こんなに朝早い時間にね。私としてはオールナイトでゲームをしていたからこれからおやすみってな感じなわけだけど。もしかして、岩屋君からの川べりデートのお誘いかしら？　だけど、ざ～んね～んで～した～。これからの私はなにか大事な用事があるっていうか、出来たっていうか。なんていうか、まぁ、そんなわけだから今日は岩屋君に付き合えないのよ。君に誰か誘える女の子がいないのは重々承知だけどね。本当にごめんなさいね。そしてね、何かきみ自身が戸惑うような事態が発生した途端に私に電話をかけるとか、その行動パターンが情けなくも、とても愛おしく見えてしまうのだけれど、そんな風に感じてしまう私の嗜好は隠すべき？　ちょっと、文芸で小説を書く感じで、剽窃してみました。出典は岩屋君の悩みの種で～す』

「その部長の心は胸の内に秘めるほのかな痛みとして大事にしまっといてください。そして、奇しくも態度ににじみ出るような感じで僕に接してください。そしたら、部長も十分可愛らしくなるでしょう」

『驚いた。岩屋君って変態だったのね』

「黙らっしゃい。部長、頼みごとを一つ良いですか？」

『どうぞ？』

「姉の事をよろしくあやしといてください」

『任せときなさい』

電話を切った後、僕は近所の適当なところへと歩き出した。

八話（後書き）

次の更新は一時間後の２２時でございます。私の小説は一話一話が短いので、読みやすくあるのではないかと自画自尊してます。だけど、読みにくいと滅多打ちされてます。めげません。頑張ります。

九話（前書き）

強い女の子は好きです。

九話

近所に川がある。名前なんて知らない。だれも知らないだろう。だって、小さい川だし。昔話とかが残る程に由緒正しき川でもない。住宅街に何かの間違いかのようにしてある川なのだ。川が至るところに在るので、必要にかられて橋も在る。名前とかは調べればわかるのだろうけれど、だれも困らないからいいや。

僕の住む団地は、自然の山であった所を無理やり切り開いて作られたそうだ。川を挟んで家々が建てられている。そして、その家の側面には山だ。北側の山は県内でも有数のゴルフ場となっていて、南側の山は新しい土地開発の為に山が削られている。土地がむき出しのままとなっているから土砂崩れの心配をしているのだけれど、心配だからと言って何ができるわけでもなく、対策は講じていない。

以上、優柔不断男の独白でした。

あまりにもな説明口調だから途中で恥ずかしくなっちゃうな。

部長からの指示は川の写真との事だったので、とにかく川の写真を撮りまくればいいのだろうけれど、どうしようか。

僕の体力を考慮するなら、下流の方に行き、町をふらふらしながら川の写真を撮るというのがベストなのだろうけれど、しかし、それではまずいだろう。

わざわざ、風景としての川の写真を要求するのだから、上流の緑深い風景がほしいのだろう。

どうしようかどうしようか。今、僕の怠惰の心と、勤勉の皮を被った臆病の虫が争っている。

結局のところ。勤勉の皮が勝利した。我が身が可愛いのだ。筋肉痛。精神的苦痛と肉体的痛み。比べてみたら前者の方がまだ良い。それに、今日は部長に姉の面倒を頼んだのだから、部長の願いことを聞き届けるというのは僕の精神的安寧にも一役買うこととなるだろう。

そもそもの部分で姉の機嫌が悪くなったのは、川に行くことが不機嫌の原因なわけで、川に行かねばならないのは部長の指示なわけで、とどのつまり、部長の所為なのだというのは念頭から外した。

だって、何を言ったとしても返ってくるのは理不尽だけだ。ならば、耐え忍ぼうじゃないか。だって、部長だもん。オマージュしてみました。語尾に「もん」とか付けてみた。可愛いかもしれないな。

九話（後書き）

次の更新は２３時です。ついてきてくださる方はいるのでしょうか。

十話（前書き）

みなさんはお姉ちゃんは好きですか？

十話

川沿いに道を進む。舗装された川は落差が二メートルほどある。車が落ちるのを防止するためか、それとも人が落ちるのを防止する為かは定かではないが、白いガードレールがある。

しばらく歩くと、ガードレールがなくなり、川へと降りることが可能な場所がある。本来そこは川へと降りることを目的としたものではないだろう。降りるためには地面を這いずりまわることになる。結果、僕の体は泥だらけになって、心なしか生臭い匂いがするのは気のせいではない。

周囲の大人の中には、子供が川で遊ぶ事を強く咎める人がいた。当時小学生だった僕は怒鳴られることが怖くて、極力川には近付かないようにしていた。

なのに、なんで？

僕は川にいるんだろう？

部長の指示だから？

いや、姉ちゃんが不機嫌になっているのに、それを承知の上で川の写真を撮るだなんてのは本末転倒かもしれない。僕は姉ちゃんに怒られるのが怖くはないのだろうか。いや、そんなことはないだろう。だって、すげえ、怖いし。今だって、後の事を考えてみたら足がぶるぶる震えてるし、胃がきゅっと締めつけられるかの様な感じがしている。　ある程度、大きくなった今なら想像がつく。僕の住む県は水難事故が多い。説明すると長いから、短く説明してみる。単語の羅列だけど。

夜景。美しい。坂。多い。重力。ニュートン万歳。水。速い。子供。溺れる。

大体これでわかってくれたかな。わからない人がいたら隣の気になるあの子に訊ねてみてね。

今の話は、恐らく一般論的な部分で考える理由。

そして、姉ちゃんは本当にそれだけで不機嫌になるんだろうか。ならない。

僕は何も知らない事だらけだ。

いらいらするね。そして、どうしようか悩んでいて、進みたい道も明確なのに、足踏みする僕にもっといらいらするという、もう救いようのないループ。誰か助けて頂戴。

……

シリアスは慣れない。シリアスなんて僕のガラじゃない。空気の入れ替えをしよう。吸って、吐いて、吸って、吐いて。うん、苔の匂いがする。緑の匂いって表現はあっているのかな？

今、僕はガードレールの無い場所を伝って川へと降りた後だ。

迷うのは辞めた。姉ちゃんに怒られるなら怒られようじゃないか。それは仕方の無いことだ。だけど、僕のことを嫌いになることはないだろう。だってねえ。なんだかんだで、飯作ってくれるほどには優しい人なのだから。

十話（後書き）

次の更新は０時でございます。予約投稿ばんにゃあい！

十一話（前書き）

ここぞというときに気配りができる女性はいいですよね。私はそんな女性とお付き合いしたいですね。女性とお付き合いとかしたことないですが。

十一話

川の水位は三センチとない。幅は三メートル程度である。地面は舗装されているはずなのだが、ところどころ割れていて、地面が見える。

そもそものところで、水がないところもあるので、僕の愛用のトレッキングシューズでも何ら問題はない。

僕は使い慣れないカメラを不格好にシャッターを押した。電子音が鳴ってフレームの風景が制止する。

ひび割れた壁から生い茂る雑草。

橋を下から見上げた写真。

川に差す木漏れ日。

水流で削れた川底。

とにかく、目に付くものはすべてシャッターを押した。押して、押して、押しまくった。僕自身、これはいらないだろう。と思う風景でも写真を撮った。

川の下から見上げる団地は不思議な心地がした。すべて見上げる形。なんだか、位置が変わるだけで、こうも印象が変わるものなのだな。

上流からは水の勢いが増してきて、足をしたたかに濡らした。じくじくと冷たくなっていく足にたまらない不快感。

川底に根を生やしたかの様に、足が動かない。先が遠くまで続く川は、僕が抜け出せない洞窟に入り込んだかのような錯覚を与えた。

今なら、まだ引き返せる。

妙な反抗心なんて押し殺して、すべて優しいものに包まれていればいいじゃないか。なにも問題はない。なにも変わらない。問題ない……はずだ。

電話のコール。

応答する。

『ああ、私ですよ。私。岩屋君の大好きな亜子ちゃん部長ですよ～。嬉しい？　私が電話をしてきて。すごい嬉しいんでしょ？　と私はうぬぼれてみる。なんで、私が電話をしているのかって言うとね、電話をしなくちゃいけない気がしたのよね。話をつなぐ的な意味合いでも私の電話は必要に感じたのよ。そして、さらにもっと重大なことがあるの。今ね、岩屋君の家の前にいるの。メリーさんじゃないわよ。まぎれもなく、家の前にいるの。キミから連絡をもらった後、大急ぎでゲームとかバックに詰め込んで、家に向かったのよ。私はとても偉いと思うの。そして、偉いの。しかし、来てみれば何よ。玄関の外にいながら、わかるこの重苦しい空気。何？　もしかして私は歓迎されてないんじゃないの。もう、岩屋君との約束を反故にして、家に帰ってゲームしたいんだけど、帰っていい？』

「却下です」

『だよね。岩屋君もガンバッテ』

「はい」

電話終了。

見えてないけど、部長は笑った気がする。もしかしたら、これは僕の精神状態に起因するかもしれない。

ああ、なんて素晴らしいタイミングで僕に電話をよこしてくれるのだろう。なんて、単純な奴なんだ。僕って奴は。

たまらなく勇気づけられた。

カメラを片手に上流へと進んだ。

十一話（後書き）

今日はこれで終了にございます。お付き合いくださった方ありがとうございます。次の更新は２２日１８時からの予定です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6770y/

部長も僕も嘘つきな小説

2011年11月22日03時10分発行